

恋のABCお届けします

Tamiko & Jet

青井千寿

Chizu Aoi

termity



エタニティ文庫

目次

恋のABCお届けします

5

もっと！ 恋のABCお届けします

191

書き下ろし番外編

ラブレターのABCお届けします

325

恋のABCお届けします

1 恋はCから配達される

徒歩十分のスーパーマーケットで買ったのは、特売のトマトと牛切り落とし。誕生日だというのに、このスペシャル感のなさには我ながら呆れてしまう。

まあ、ついでに高級アイスクリームも買ったあたりがスペシャルだということにしておこう。ラムレーズンとチョコレートブラウニーで迷って、結局両方買って来た。バーステースペシャルである。

——本日七月二十一日、私、中城多美子^{なかじょうたみこ}はとうとう三十歳を迎えてしまった。

昨晩はレンタルDVDショップでやたらロマンチックなタイトルの洋画を借りて、お気に入りの日本酒とお手製のつまみで祝杯をあげた。お一人様バースデーカウントダウンパーティーといったところか。

ところがこの洋画が曲者^{くまもの}だった。

とんだお色気映画で、中盤以降^{なま}以降艶めかしい絡みの連続。

おかげで何やらモンモンとしたやり切れない気持ちになってしまった。エンディング

後、私は日本酒を飲みまくり、つまみを作り足し、自宅で一人酔っ払いながら今日の誕生日を迎えたのだった。

女を捨てたまま、栄え^はある三十代突入である。

(午後一時四十分……あと二十分)

私は買い物袋を提げ^さながらスマホで時間を確認すると、少し歩みを速めた。

マンションの一階に入っているプール付きのスポーツジムの方を見ないようにして、なぜかいつも開きっぱなしになっているオートロックのエントランスをくぐる。

このマンションに引っ越してきて三年。

子供のいない夫婦やお年寄り夫婦が多く、落ち着いた雰囲気なのは気に入っているが、一階のテナントだけがどうも気に入らない。

スポーツジムでは室内が見えないよう、大きな窓全体に反射フィルムを貼っている。

このフィルムが私の体を残酷に映し出すのだ。一五八センチ、六十四キロのダイナマイトボディを……

買い物袋の食い込んだ腕の肉、服がばつんばつんになっている背中、スカートのシルエットを台無しにする大きなお尻。

本人の許可なくこんな無様な姿^{ぶざま}を反射させるなんて、これは無言の圧力だ。

いや、無言ではない。

ポストに『ご近所様限定クーポン』を定期的に入れてくるのだから性質が悪い。そんなに私を入会させたいのだろうか。

(人のコンプレックスを商売にするなんて……)

イライラと反射フィルムを覗んだら、ダイナマイトな私が覗み返してきた。

マンションのエントランスホールを進み、エレベーターに乗ると、汗が噴き出してくる。

私が二時になる前に自宅に戻りたいのは、だいたい毎日この時間帯になると、宅配便が届くからだ。

自宅で仕事をしているせいで、資料や納品物などの発送・受け取りは、宅配業者と直接することが多い。特に今日は仕事関係の荷物が色々届く予定だった。

不在だと配達員さんに迷惑をかけてしまう……なんていうのは表向き理由。

実はこのマンション担当の配達員さんが私好みのイケメンで、彼に会えるのを勝手に楽しみにしているから、というのが紛れもない本音だ。

今の私の生活では、外界との接点なんて食品の買い出しくらい。

スーパーにはレジ打ちのおばちゃんか鮮魚売り場のおじさんしかいないから、イケメン配達員に自宅のドアを叩かれるのは、私にとってアイドル握手会並みの重要イベント

なのだ。

自宅に入り、冷凍庫にアイスクリームをしまつて、汗ばんだ顔をタオルでガツツ拭く。

二十代前半には一応毎日していた化粧も、いつの間にならなくなった。

自宅で仕事をしていると本当に誰とも会わないから、肌負担をかけるだけバカバカしい。

一度スッピン生活に慣れてしまえば、化粧は苦痛でしかなかった。

髪を一つに括って、仕事場に行っている部屋で作業をしていると、チャイムが鳴る。

二時十分。王子様の到着だ。

私は再び汗の浮かんできた額を擦り、手ぐしで髪を撫でつける。

『イーグル便です。お届けものです』

インターフォンからいつもの柔らかい声が出た。優しげなこの声も私のお気に入り。

そしてお行儀の良い彼は、エントランスホールの扉が開きっぱなしになっていても、下のインターフォンからコールしてくる。小さなところで感じられる礼儀正しさも、彼の素敵ポイントだ。

「ご苦勞様です」

インターフォンにそう答えて、私はエレベーターで上がってくる彼を玄関で待ち構

える。

コン、コン、コン。

玄関ベルがあるのに、彼はいつもドアを小さくノックする。

一、二、三。

息を殺して三つ数えた私は、お上品な作り笑顔でドアを開けた。

ああ、今日も男前だ。人懐っこい大きな瞳、柔らかそうにはねる髪。均整の取れた逆三角形の体は、身長百八十七センチ近くありそう。

歳は私よりちよつと下だろうな。

今日は暑かったから制服の縞シャツが汗で肌にくっつき、そのシャツを押し上げるように大胸筋が上下しているのが分かる。これは今まで想像していた以上にマツチヨかも。

やばい、マジいい男。付き合うなんて恐れ多いけれど、ちよつとだけ……指一本でも触れてみたい、なんて考えてしまうのは、昨晚見た映画のせいだろうか。

私の頭の中で、あのしつこいほどの男女の絡みがフラッシュバックした。

彼はどんなエッチをするのだろうか……アブない妄想に取りつかれそうになっていると、彼の声が私を現実に取り戻す。

「ここ、サインお願いします」

「……はい。今日は暑いですね」

「ヤバいっすね」

「あ、アイスクリームあるんで、よかつたらエッチしますか？」

「……はい。あ、でも配達終わらせないとダメなんで、仕事終わってからまた来ます」

—— 待て、待て、待て——！！

今私、何て言いました？ エッチとか口走りませんでしたかああ？

私が狼狽^{うろた}えている間に、彼はドアを閉めて出ていってしまふ。

閉まったドアを呆然と見つめながら、私は自分の言葉を頭の中で再生してみた。

—— アイスクリームあるんで、よかつたらエッチしますか？

……言っちゃったよね？ ……やっぱり言っちゃったよね！ 何という逆セクハラ！

ちがぁーう！ 本当は「アイスクリームあるんで、よかつたら一ついりますか？」って言いたかっただけなのに。

言い間違えた……昨晚見たお色気映画のフラッシュバックが、私の脳みそをピンク色にショートさせたのだ。

自分の情けない言い間違いに、ここ数年感じたことのない羞恥^{しゆうち}心が湧き上がってきた。玄関で一人赤面しながら髪をかきむしってみてももう遅い。

中城多美子三十歳。人生の黒歴史に残る誕生日を本日迎えました。

玄関でしばし放心した後、私は受け取った荷物に視線を落とした。イケメンが持つてきてくれた荷物は全部で三つ。

一つは仕事関係のもので、出版社の名前が印刷された大型封筒。

もう一つはえっちゃんからだろう。えっちゃんは、中学生の頃から毎年欠かさず誕生日プレゼントをくれるありがたい大親友だ。

そして最後の一つは、エバーラスティング商会から。内容物の欄には「化粧品」と書かれている。

この荷物を見た私は、思わずハアアアと大きなため息を吐き出した。

こんな気分の時にコイツを見たくはなかった。仕事の資料として購入したソレは決して化粧品などではない。

私は箱を開け、中身を確認した。

そこに収まっていたのはオーダー通り、大人の玩具。正式名称バイブレーター（性具）。

大人の玩具を通販購入するわ、イケメン配達員をいきなりエッチに誘うわ……これでは、まるで欲求不満をこじらせた三十路独身女性みたいじゃないか！

確かに私は欲求不満をこじらせた三十路独身女性かもしれないけれど、エッチに誘ったのはい言間違いだし、大人の玩具は仕事用だし……

「誤解だ〜〜！」

私は一人吼ええると、行き場のない羞恥心に悶えながら再び髪をかきむしった。



『マジ！ 超ウケるんだけどお』

電話の向こうで、ギャハハハと大爆笑された。遠くからはキャハハという可愛い笑い声も聞こえてくる。

えっちゃんに電話して誕生日プレゼントのお礼を言ったついでに、先ほどの逆セクハラも報告したら、予想以上の大笑い。お笑い芸人なら喜ぶところだけど、ただの三十路女なのでウケても嬉しくないです。

ちなみにギャハハハという下品な笑いはいえっちゃん、可愛い笑いは二歳になるえっちゃんの息子、俊平君。

えっちゃんは私と同じ年ではあるが、早々と結婚して、今や一児のママだ。

『それで、エッチするの？』

「え!？」

『仕事終わったら来るんじゃないの？ そのイケメン配達員』

「来ないでしょ。来たとしてもアイスクリーム狙いだろうし……そもそも、私の言い間違いに気がついてないかも」

『そんなの分からないじゃない。一応シャワー浴びて準備しときなよ！ 私からのプレゼント使ってね』

私は片手に握りしめていたえっちゃんからのプレゼントをもう一度眺める。

スケスケのバンテイトとキヤミソールのランジェリーセット。ピンクのシフォン地に黒のレースが小悪魔チックだ。もちろんサイズはLである。

サイズは合うけどデザインが合わない。このデカ尻にフリルの付いたTバックなんて着けたら、フリルが泣くわ。

『だー！ チェチエチエチエ、だー！ だー、ママ！』

『倭ちゃん、おやつ欲しがって暴れてるからもう切るね。タミの仕事落ち着いたらゆっくり会おうよ。倭、ダメ！ あ……じゃあね、面白いことになったら報告してね』

私はこれ以上面白いことにならないようにと祈りながら電話を切った。

えっちゃんのアドバイスを聞き入れたわけではないけど、シャワーを浴びておくことにする。

自分が放った逆セクハラの衝撃で、嫌な汗をかいていた。

この後、いつも通り仕事場に籠ると、時間を忘れて没頭できた。

時間を忘れるのは良い仕事ができている時だ。ダメな時はしょっちゅうウロウロしながら飲み食いしてしまうのに、今日は気がつけば四時間が経過していた。頭を上げると、レースのカーテン越しに夕焼けが見える。

座りっぱなしだった体を解しつつキッチンに行き、晩ご飯の支度をする。

一人暮らしを始めたばかりの頃は、コンビニ弁当や出来合いのお惣菜を買うことが多かったけれど、歳を重ねるにつれ料理をする回数が増えた。

どんなに適当に作っても、手料理の方が優しい味がするし、お腹に残る。誰に食べさせるわけでもなく、ただ自分のためだけに手早く作る料理だ。

今日は、酸化する前に使い切りたかった赤ワインでハヤシライスを作ることにした。

特売の牛切り落としは、脂身が多めで煮込み料理にはもってこい。特売の超完熟トマトを手でぶちゅちゅつと潰しながら投入する。仕上げに生クリームを入れたけれど、買ってないから牛乳でいいや。

煮込む間にキッチンを片付けていると、プツッとインターフォンの音が部屋に響いた。

「まじか……」

一人そう呟いた私は、インターフォンを睨んで固まった。

忘れていたわけではない。イケメンは確かに言った。「仕事終わってからまた来ます」って。

「はい」

恐る恐るインターフォンに答える。

『イーグル便です』

「……ご苦労様です」

アイスクリーム食わずに取っておいてよかったー！ ……って、アイスクリームだね、目的は……

握りしめていたお玉をシンクに放り投げ慌ててアイスクリームを取り出した私は、玄関付近でウロウロする。

やがてコン、コン、コンと、いつものようにドアが三回小さくノックされた。

一、二、三。

数えて、私はアイスクリーム片手にドアを開ける。

「こんばんはー」

イーグル便のトレードマークでもある縞模様のシャツを着たイケメン配達員が、いつもの爽やかさで玄関に入ってきた。

昼間見たばかりだというのに、思わず見とれてしまう。柔らかな微笑みに、筋肉質の

体。やっぱりいい男だ。

シャツはすっかり乾いているけれど、仄かに漂ってくる汗の匂いは官能的にすら思える。

彼のフェロモンに悩殺されて、思考が止まってしまふ。

私の脳は、再びB級映画の一番いやらしいシーンを再生し始めた。

重なる唇、蠢く四肢、絡み合う男女。私が最後にあんな濃密な時間を過ごしたのは、いつだったろう……

（ダメー！ こういうハレンチな妄想に取りつかれたから、さっきは失敗しちゃったのに）

妄想を振り払おうと顔を引き締めた私に、彼は言った。

「アイスクリーム、いただきに来ました」

彼は私の手からアイスクリームを取り上げ、長い睫毛に縁どられた目を細めて微笑む。その煌々しさに目が釘付けになった。

（そうか、やっぱりアイスクリームだよね……）

納得しつつも、眩しい笑顔の前にポーツとしてしまふ。うう……そのクソ可愛い微笑みは反則です。

ほんやりしている私を面白そうに見ながら、彼は言葉を続けた。

「ラムレーズンとチョコレートブラウニー……両方食べちゃっていいんですか？」

「あ、どうぞどうぞ……全部……」

「全部？ 本当に？」

彼は悪戯いたづらっぽくそう言うと、チョコレートブラウニーのふたを開けて裏をぺろりと舐なめた。

そしてスプーンがないことに気がついてキッチンに向かおうとした私に、人さし指を差し出してくる。

彼の節ふしくれだった指先にはアイスクリーム。

あなた、それを私にどうしろと……

「はい」

「……」

アイスクリームののった人さし指が、私の唇に触れそうなほどに近づいてくる。私は自分でも信じられない大胆さで彼の指を口に含んでいた。

小さなアイスクリームの塊かたまりが口の中で溶ける。

緊張しすぎて味がしない。

だけどそれは媚薬びやくのように私の奥で甘く溶け、固く閉じていたはずの心のネジを外してしまう。

「全部……食べて」

私はそう囁ささやいた。

優しさを湛たえた彼の目が鋭くなり、その視線が私の視線と絡み合う。

アイスクリームの魔法で、二人の距離が急速に狭まっていた。

「アイスよりエッチの方がいいな」

彼は私の耳元で小悪魔的に囁ささやいた。

（やっぱりちゃんと聞き取っていたんだ、私の言い間違い）

ほんやりそう思っていると、彼はさらに言った。

「キスしていい？」

なんと答えればいいのか迷っているうちに、気がいたらキスをされていた。

そよ風のような優しいキス。汗とチョコレートブラウニーのキス。

「もっとキスしたい。全部食べてしまいたい」

彼の吐息に交じる言葉は、熱風のように私を耳から溶かしていく。

彼の唇が私の耳を撫なで、首筋を撫なで、また唇に戻ってくる。

日焼けした顔とキラキラ輝く瞳が私を捉とらえて離さない。

「セックスしよ」

「……はい」

もう、どうなってもいいと思った。

こんな普通じゃないと分かっているけど、ここで断ったら、私はきっと女を捨てるどころかおっさんになってしまっただろう。やっぱり、女として求められている時には女でいたい。

彼は私の返事を聞いて、確認するように再びキスをしてきた。

今度は優しく触れるだけのキスじゃない。唇の間から熱い舌を割り込ませ、私の口内を探索する。

誘われるがまま、私は彼の舌に自分のそれを絡めた。

熱い彼の舌が私の舌を溶かしていく。

熱い……熱い……

「……大丈夫？」

彼が私の顔を覗き込んでいた。

キスするのに夢中で、息を上手く吸えていなかった私は、意識を軽く飛ばしていたらしい。

恥ずかしい。三十歳にもなってキスで失神しそうになるとは……

「ごめん、焦りすぎた。ゆっくりしよ」

そう言うと、彼は私をひよいと抱き上げた。

いわゆるお姫様抱っこ！ 人生初のお姫様抱っこ!! だけど私、六十四キロのお姫様だから。

「お、重いから！ 私重いから……」

「ん〜……五十キロくらい？ 全然平気。ベッドルーム行こ」

「……リビング入って左」

「オッケー、お邪魔しまーす」

少年のような爽やかさで、彼は大人の欲望を満たすためにベッドルームへ向かう。私は彼の首にしがみつき、妄想体重五十キロのお姫様になっていた。

宣言通り、彼は私をベッドにゆっくり下ろすと、キラキラとした笑顔で優しいキスをくれた。

そして私のご機嫌を伺うように、あちこちに唇を落とす。

彼は一つに括っていた私の髪を解き、「いい匂い」と言っただけでそこに顔を埋めた。

(えっちゃん、シャワーを勧めてくれてありがとう)

大親友に感謝しつつも、私は彼の指がカットソーの中にちょこちょこ入るたびに身を固くしていた。

こんなイケメンに触られる時が来ると分かっていたら、ここまでおなかの肉、付けな

かったのに……

「俺、仕事終わって真っ直ぐ来たから汗臭い。シャワー使わせてもらおっかな」

いかにも洪々といった感じで私から体を離れた彼が、そう言っただけで着ていた服を勢よく脱いだ。

浅黒く日焼けした筋肉質な肉体が現れ、私は思わずため息を漏らす。なんて綺麗に割れた腹筋。こっそり想像していたよりずっとマッチョだ。

「……汗の匂い、嫌いじゃないよ」

そう言って彼を引き留めた。

体を離したくないのもあったけれど、本当に気にならないのだ。

汗の匂いが好きなわけではない。けれど、彼の匂いは、彼と密着している証のようで愛おしい。

「本当に？　じゃあこのまま続行したいな。今いいところだし」

「……うん……あの……私、洋服着ていい？」

「え？　どういうこと？」

「あの、下着脱ぐから、下の方からちゃちゃっとしてもらえれば……」

「……何で？　見られたくない傷でもある？」

「ううん、そんな深刻な理由じゃなくて……食糧危機に備えて蓄えた贅肉が……」

こんな告白をするのが恥ずかしくて、思わず目を逸らす。

ククク……と押し殺したような声に顔を上げると、彼が顔を赤くして笑っていた。

「可愛い！　俺、楽しくなってきた」

そう言った彼は、私の服をむしり取っていく。

ギャー！　可愛いって言われて一瞬極楽気分になったのに、ジェットコースターで地獄行き！

夏場の薄着は、一瞬で脱がされる。

カットソーは放り出され、ブラは早業はやわざで取り外された。

(ヤバい、ジーンズにがつつり腹肉がのつてるのを見られる！)

そう思った私の行動はすばやい。自らジーンズを脱ぎ、色気のないショーツ一丁になつた。

「脱ぎたいのか脱ぎたくないのか、どっち？」

顔を覗き込んでくる彼は楽しそうだ。

「もうどっちでも……あ……」

乳房にキスをされて、私は声を失う。

彼の舌がゆつくりと乳首をなぞった。最初はこそばゆかった感覚も、ぐんぐん気持ちよくなっていく。

彼は片方の乳首を舌先で転がしながら、もう片方を指で弄ぶ。
 (おっぱいを触られるのってこんなに気持ちいいんだ……ううん、この人が上手なのかも……)

快感がじんわりと全身に広がっていき、急速に体の奥が潤ってくるのを感じた。

「タミコちゃんのおっぱい、ふわふわで超気持ちいい」

「……なんで名前知ってるの?」

「中城多美子。知ってるよ、送り状に書いてある」

「……ああ! ……」

不意打ちにショーツの中に手を入れられて、私は思わず腰を引いた。

彼の骨ばった指が下の毛を撫で、ゆっくりと割れ目に入り込む。

潤いの中に指先を浸した彼は、滑らせるようにそこを探索した。

私は突然怖くなって反射的に足を固く閉じる。

今にも泣きそうに体を強張らせている私に、彼はキスをしながら話しかけてきた。

「触っていい? 触らせて。タミコ」

「やだ……その名前嫌いだから……呼ばないで」

「何で? 良い名前じゃん」

「ああ……ん……何か昔っぽい名前……あ……ヤダああ」

唇を吸われ、熟れた瞳で見つめられる。

彼は上手に私の性欲をかきたて、羞恥心を消してくれた。

彼の長い指に敏感な部分をかき回されて、私はベッドの上で腰をくねらせる。

指の動きに合わせてくちゅくちゅと淫靡な音が響いた。彼はわざと音を鳴らすように、

二本の指を私の中で揺らす。

「すっげ濡れてる。ここもほら……硬くなって……」

「だあ……めえ……あ……ああっ!」

自分でも分かるほど硬く膨れたクリトリスを指先で弾かれた。私は下半身から駆け上がってきた快感に、ビクツと体を反らす。

休みなくやってくる甘い刺激にビクビクと体を震わせていると、彼は飢えた雄の目で

私の顔を覗き込んだ。

快楽の秘密を全て知っているかのように、容赦なく指が動かされる。

根元をコリコリと刺激されると、呼吸をしようとしても喘ぎ声になってしまう。そんな自分が恥ずかしくて両手で顔を覆った。

「タミちゃん、ここ好き? もっと欲しい?」

「ヤ……ああ……夕あ……」

「嫌? でもこんなに吸いついてくる。熱くてくちゅくちゅで……」

「いやあ……」

「タミちゃん、エロくて可愛い……もつと喘いで。もつと声を聞かせて。俺に全部見せて」

私の体は刺激を求めて自然と開いていた。

足を広げ、彼の前に自分のあそこを晒す。

もつと触ってほしい、もつと感じさせてほしい。

彼の指に欲望を掘り起こされ、私は乱れていく。

彼は左手で私の右足を高く持ち上げて、右手でクリトリスと膣の両方をいっぺんに攻めてくる。

粘着質な液体をグチュグチュとかき混ぜる音はどんどん大きくなり、私の喘ぎ声に重なった。

大きな快感が何度も体を駆け抜け、私の中で花火のような炎を瞬かせる。

「あ、あ、……ダメえ……くる、くる、イっちゃう……」

「来るの？ 行っちゃうの？ どっち？」

「あ、んあ、イっちゃう、あ、イっちゃう、あ！ ……」

体の中で快感が共鳴して輝く。

世界が弾ける。

真っ白の空間。

やがてそこに私の鼓動が響き始める。

私……気持ちよすぎて泣いてる。

「タミちゃん」

しばしの間、別世界に飛ばされていた私は彼の声で引き戻される。

涙が滲んだ私の目に飛び込んできたのは、彼の大きくなったアレだった。

でかつ！ 私は慌てて目を擦り、涙を拭い去る。

はるか昔、十年ほど前に見たソレとは、サイズがかなり異なる気がする。

比較対象は一本だけなので、どれぐらいが平均なのかは分からないけれど、私はリアルに心配になってきた。ものすごく久しぶりだからだ。

別の意味で涙目になった私をよそに、彼はどこからか出てきたコンドームを装着して準備完了。

キラキラ度が増した大きな瞳で私に微笑みかける。

「あの……大きくないですか？」

その巨大なものに怯えるあまり、思わず敬語になった。

「タミちゃんのイキ顔がエロくて大きくなっちゃった」

そんなテヘペロみたいな可愛い顔されても、下半身は極悪ですから。

「あの……ゆっくり挿れて……ね……」

「初めて？」

「いや、違うけど……久々だから」

「じゃあ……もうちょっと挿れやすくしよっか」

軽く押されて、私はベッドに倒れる。

彼はまた私の唇を塞ぐと、情熱的なキスをたっぷりくれた。

そして、彼は唇を私の下半身へ真っ直ぐ滑らせ、「開けごま」とばかりに両腿にキスをする。そしてその中心に顔を埋めた。

(ウソ、ウソ、舐められてる！)

あそこを男性に舐められるなんて、生まれて初めてだった。昔付き合っていた唯一の彼はそういうことをしない人だったから、この年齢になるまで未体験だったのだ。

なんだか畏れ多くて初めは緊張していたけれど、ぬるりと舐め回された途端、すぐに快感がそれを凌駕していった。

彼はそれを感じ取ったんだろう。ますます舌の動きを速くして私を翻弄していく。

「あひゃ……ああ……あ……あん……」

一度口を開いてしまうと喘ぎ声が止まらない。

「……タミちゃん……これ、好き？」

「……大……好き……」

「じゃ……今度また……しよう。今は……挿れさせて……我慢できない」

顔を歪ませながら声を絞り出すようにして言うと、彼は体を起こした。

そしてすばやく太腿の間に腰を収め、私の両足を抱え込む。

私のあそこに彼のモノがぐりぐりと押しつけられるけれど、なかなか入りそうにない。

「挿れるよ」

彼はそう宣言すると、私の両足を持ち上げて自分の肩にかけた。

私の腰が自然と上を向く。そこへ彼のモノがゆっくりと力強く挿れこまれた。

一瞬電撃が走ったけど、全部収まってしまおうと、その圧迫感意外にも心地良かった。

「……大……好き……」

「じゃ……今度また……しよう。今は……挿れさせて……我慢できない」

顔を歪ませながら声を絞り出すようにして言うと、彼は体を起こした。

そしてすばやく太腿の間に腰を収め、私の両足を抱え込む。

私のあそこに彼のモノがぐりぐりと押しつけられるけれど、なかなか入りそうにない。

「挿れるよ」

彼はそう宣言すると、私の両足を持ち上げて自分の肩にかけた。

私の腰が自然と上を向く。そこへ彼のモノがゆっくりと力強く挿れこまれた。

一瞬電撃が走ったけど、全部収まってしまおうと、その圧迫感意外にも心地良かった。

彼は氣遣うように、私の顔を覗き込みながらじっとしている。性欲に支配されていても、相手を思いやる余裕を残しているようだ。

「タミちゃんの中……まじ気持ちいい。……ヌルヌルのマシユマロで締めつけられている……みたい」

そう言つて彼は、私の様子を窺いながらゆつくりと動き出す。

「ん〜あ……」

もう喘ぎ声が止まらない。過去のセックスでは荒い鼻息しか出なかったのに、今は息を吐こうとすると喘ぎ声になる。

彼のモノが私の奥を擦るたびに、ジーン、ジーンという快感が背筋に走り、体中に広がった。

気持ちよすぎる……もつと突いてほしい。

「もつと……」

「……もつと……欲しい？」

「欲し……い。いっぱい……突いて……」

その途端、彼は肩にかけていた私の足を抱えながら、思いつき私を引き寄せた。根元まで深く挿し込まれ、私の子宮口を乱暴にノックする。

「あ！ あや！」

すごい……すごい存在感。

圧迫されながら体の内側を執拗に擦られ、私は掘り起こされる快感に鳥肌を立てた。

彼は一気に全部捻じ込んで引き抜き、また捻じ込んでくる。

激しく体を揺さぶられながら、私は自分の口を両手で押さえていた。あまりの気持ちよさに、油断すると悲鳴のような声が出てしまいそうだったから。

彼の動きに合わせて、グチュ、グチュ、グチュ、グチュ、という愛液のいやらしい音がベッドルームを満たしていく。

「タミちゃん……すごい……たくさん濡れて……ヤバイ」

彼が呻くように低い声でそう言ったのを、私は快楽の嵐の中で聞いていた。

どこかに掴まっていなと呑み込まれてしまいうので、私は一生懸命、彼の体に足を巻きつける。

「気持ち……いいいい……」

ゾクゾクという快感に襲われて、私は泣き声で彼に訴えていた。

もう止めてほしい。これ以上気持ちよくなったらおかしくなりそう。

「あぁあー！」

激しく突かれながら、私はもう我慢ができなくなって高く声をあげる。

「ああ……もう……」
 手負いの獣みたいに彼がそう唸ると、大粒の汗がポタポタと私の体に滴り落ちてきた。彫刻のような彼の体が大きく震えた瞬間、私の中で彼が膨らむ。ドクン、ドクン、と彼が私の中で脈打つを感じながら、私は夢中でその体にしがみついていた。



当たり前のように腕枕してくれる彼の名前を、私はまだ知らない。知りたいけど知りたくない。

名前を知ってしまったら、彼にときめいてしまうのは分かっていた。

私はざわめく気持ちにふたをするように、目を閉じる。

そして汗と体液が混じった官能的な香りの中、ただ漂っていた。

愛し合った後にしか発せられないその匂いは、不快ではない。だけど彼は気になったようだ。

「タミちゃん、俺マジ汗臭いだろ？ シャワー借りていい？」
 と言ったかと思うと、「一緒に入る？」と私を誘った。

「いや、いや、いや、私は結構です」

どこぞの遠慮するサラリーマンのように断る私を、彼は面白そうに見る。それから立ち上がると、「お風呂場どこ？」と可愛い笑顔で私に訊いた。

性欲を解放した後の彼は、イノセントな少年みだいた。

（私をちゃん付けで呼んでるけど、年下なんだろうな）

そう思ってこっそりため息を吐きつつ、私は開けっ放しのベッドルームから見えているバスルームのドアを指さした。

無防備に全裸を晒す彼の後ろ姿を、私は思わず凝視する。

すっごくいい。正面もいいけど後ろ姿もいい。

広い背中からウエストへと傾斜を描く日焼けした肌。逆三角形の上半身を支えるヒップは筋肉で盛り上がっていて、二つの岩みたい。そして遅い太腿。

そんな姿をほんやりと見送ると、しばらくしてバスルームからシャワーの音が聞こえてきた。

自分の部屋に自分以外の人が使うシャワーの音が響くのは、なんだか新鮮で嬉しい。ベッドの上で体を甘く軋ませながら、私はこの一時間で我が身に起こったことを振り返っていた。

——とんでもなくふしだらな行為をしてしまった。

職業はともかく名前も知らない男性を自宅に招き入れ、エッチをしてしまった。私は天井に向かってため息を吐き出す。だけどそれはため息というより、甘い吐息だった。

ヤっちゃった。後悔すべきなのだろう。だけど、今の私を包むのはトロトロに甘くて温かな充実感だ。

私は起き上がり、さっきまで彼の所有物のように扱われていた自分の裸体を服の中に収めて、ゆっくりとベッドルームを出た。

彼に渡す新しいバスタオルを用意して、キッチンに向かう。

お腹を空かせているかもしれない彼のために、何か食べるものを用意しておこう。



「タミちゃん、一人暮らし？ いいマンションだね」

上半身裸でボクサーパンツだけ身につけたイケメンが、私の作ったハヤシライスを食べている。

シャワーから上がった彼が予想通り「腹減った」と絶叫したので、ちょうど出来上がった夕食を提供したのだ。

ハヤシライスはドリアやオムレツのソースにも使えるので、いつも多めに作る。

今日もたくさん作ったのだけれど、大盛り二杯目に突入している彼の食べっぷりを見ると、余ることなんてなさそうだ。

「自宅で仕事しているから、2LDKじゃないと片付かなくて。いいマンションなんだけど、ファミリー向けだから、一人暮らしだとなんだか目立ってる気がする」

「主婦は何でも話題にするしな。仕事って何してんの？」

「……デ、デザイン関係……」

「おおクリエーター系！ 俺そういう方面の才能は全くないから尊敬する」

話しながらも彼はどんどんハヤシライスをお腹に収めていく。私も早食いな方だけど、彼も負けていない。

自分の作った料理をたくさん食べてもらえるのって、こんなに嬉しいことなんだ。

初めて知った幸福感に私は酔い、味もよく分からないまま、自分の分を食べ終わった。「ごちそう様でした！」

と小学生のように元氣よく言った彼は、空からになった皿をキッチンに運んでいく。

「テーブルの上に置いといてね」と声をかけたのだが、キッチンからは水を出す音が聞こえてきた。見に行くと、彼がお皿を洗ってくれている。

自分の家のキッチンで、いい男が食器を洗っているという夢のようなシチュエーショ

ンを心に刻みながら、私は素直にお礼を言う。

「ありがとう」

「こちらこそ、ありがとう」

そして彼は私にキスをくれる。

優しい瞳、優しいキス。

夢のように素敵な時間。

だけど大人だったら知っている。どんな素敵な夢だって、いつかは覚めて現実引き戻されると。

名前も知らない彼の優しい笑顔は、やがて少しずつ困った顔になっていく。

ほらね、夢は覚めちゃうんだ。

私の予感的中した。

「タミちゃん、俺……あの……言いくいんだけど、今、女の人と真剣に付き合うとか、そういうの考えてないんだ」

「え、あ！ 私もそんなつもりないから!!」

私の喉から必要以上に大きな声が出た。

私の顔も必要以上に笑っている。

何も傷つくことなくない。現実引き戻されただけ。

2 ジェット便は愛を届ける

一人前の社会人でも、在宅ワークだと起床時間は自由だ。

私は大抵、深夜二時頃まで作業をして、午前九時には起床する。

朝起きたら、男性並みの適当さで身支度を整え、片手にジャムをのせた食パン、もう片手にコーヒーを入れたタンブラーを持って仕事部屋に入る。

毎日のことだけど、この部屋は起きたばかりの頭にはあまり気持ちのいい場所ではない。

本棚に並んでいるビアズリーやフェルメールの画集の間には、さりげなくグラビアアイドルのヌード写真集。建造物の写真集とボタニカルアート集の間には官能小説。

画材を収納してある棚には、ペインティングオイルと一緒にアダルトグッズが並び、机の脇には胸も露わな女性のイラスト。

デザイン関係。私はそれほど親しくない人に対し、自分の仕事をそう伝えていた。だってイラストレーターだと言ったら、大抵「見せて」って言われる。

でも、こんなエッチな絵、見せられるわけがない。

私は主に成人向けの絵を描くイラストレーターを生業なりわいとしていたのだ。昔は全然売れない漫画家だった。メジャーな雑誌に短い読み切りが二作掲載されたものの、そこで頭打ち。

それでも、中学時代から一緒に漫画を描いていたえつちゃんやアシ仲間と一緒に、B本をコミケで売ったりしていた。

その時、ラノベを書いているサークルから、挿絵さしえの依頼を受けた。以来、ジャンルを問わずに格安で挿絵を描きまくっているうちに、〃早い、安い、うまい〃が揃ったイラストレーターとして名前が売れた。

ゲームになるほどバカ売れた日系ラノベの挿絵を描いたことが転機となり、今では個性的な性描写のできるイラストレーターとして、有名な作家先生の装丁まとうていイラストも描かせてもらえるようになった。

私は自分の仕事に誇りを持っている。昔は誰もが描きそうな絵を描いていたけれど、たくさん悩みながら描き続け、今では私でないと表現できない絵を創作していると自負している。

だけどこの誇りは大声で叫べる類たぐいのものじゃない。

(とりあえずこれは破棄かな)

私はコーヒを飲みながら、昨夜から描きっぱなしで机の上に放置してあるデッサン

画を見下ろした。

顔、背中、指、上半身、下半身——彼の全て。

私は彼が出ていってから、脳に刻まれた彼の姿をデッサンしまくった。

何度描いても、あのしなやかな逞たくましさ、弾力のある肌質が表現できなくて、朝方まで何枚も描き続けた。

もう二度と彼の体を見ることができないならば、せめて紙に記録しようと思つてのことなのだが、改めて見ると、彼への未練に満ち溢あふれた絵だ。

昨晚の夢を、夢で終わらせたくないと言っているようだった。

私はそれら二十枚ほどの紙を勢いよく丸めると、ゴミ箱に投げ入れる。変に未練を残したら、彼に申し訳ない。

「真剣に付き合うとか、そういうの考えてないんだ」と言ってくれた彼に、私は感謝している。

唯一付き合った男性である大学の先輩は、真剣に付き合う気などなかったくせに真剣なふりをして、最後に手ひどく私を捨てたのだ。

三十歳の今なら、日本酒を飲んで涙の一つも流せば忘れられるだろう失恋も、二十歳の私にはきつかった。

名前も知らないあの彼は、何も悪くはない。

「ちょっと遊んだだけ」という警告をしてくれた彼は、嘘をついた元彼よりずっと親切だ。



『なにそれ！ セフレになれって言ってるようなもんじゃん。最悪だよソイツ』
 「セフレって、継続的にセックスする関係のことでしょ!? でも、私はもう二度と誘われないと思う。だから、セフレなんていいものじゃないよ」

遅めの昼休憩を取りながら、私は電話でえっちゃんに昨夜のことを報告した。

笑ってくれると期待してたのに、受話器の向こうから聞こえてくる彼女の声は不機嫌だ。

『タミ、もう少し自分を大切にしなよ。殺されて金品奪われても仕方なかったんだからね。女の一人暮らしは狙われやすいんだよ』

(シャワー浴びて準備しとけて言ったのはどこのどいつだ)

一方的なえっちゃんからの非難に、私は青立ちをつのらせる。

えっちゃんが心配してくれるのはありがたいし、自分が間違った行為をしたのも分かっている。だけど結局、それを望んだのは私なのだ。

「私としては後悔してない……ってというか、いい誕生日の思い出になって感謝してるくらい」

『でもセックススしといて名乗らないような男、絶対クズ！都合のいい女になっちゃダメだよ。イーグル便ならまた配送で顔合わせるんでしょ?』

「まあ顔は合わせると思うけど……二人ともいい大人だから……放つといて」

『……』

「……ごめん……」

『すでに惚れてるじゃん』

「……惚れてない……」

私は、ぎくしゃくしたままえっちゃんとの電話を切った。

えっちゃんは大親友。だけど早々とオタクをやめて素敵な旦那さんを見つけ、可愛い子供までいる。

そんなえっちゃんには、私の気持ちなんて分からないだろう。十年もの間、男に相手にされず、毎日自分だけのご飯を作って、自分の発する音しかない家で毎日戸締まりをして一人寝する三十路女の気持ちなんて。

恋とか、そんな贅沢なものじゃない。

私の言い間違いと彼の性欲が、アイスクリームの魔法でまたまた絡み合った。

ただ、それだけ。

私は壁に掛けている時計に目をやる。

一時二十分。

たぶん今日は配達がないと分かっているのに、ついつい時間を確認してしまう。

配達は毎日必ずあるわけではない。週に四日程度だ。

(今日は顔を合わせない方がいい。昨日の今日だし、彼だって気を使うだろう)

朝から何度もそう思った。

それなのに私は時計ばかり見ている。

この日は自分でも呆れるほど時計を気にしていて、いまいち仕事に集中できなかった。かといって、留守中に配達に来たらと思うと、出かけることもできない。そうして無駄に時間を過ごして、気がつけば夕方の六時。

こんなペースで仕事してちゃダメだ。

私は普段からたくさんの仕事を抱えているため、常に締め切りに追われている。早い、安い、うまいで名前を売ってしまったため、キャリアは積んでいるのにまだに仕事の単価が低い。だから数をこなさなければ、纏まった金額にならないのだ。

一つの仕事がスケジュール通りに進まなければ、その次の仕事に支障が出てくる。

遊びのセックスだったのは重々承知しているくせに、仕事に支障を来すほど動揺している自分が情けなかった。

私はベランダへ出て、オレンジ色が濃くなりつつある空を見上げながら、ジョウロで鉢植えに水をやる。

小さなベランダで育てているのは、十本のマリーゴールドと、大きく育ったペチュニア、そして食用のシソ。

マリーゴールドは、引越してきた時に買った一株から種が取れて以来、毎年プランターに植えている。

ハンギングにしている二株のペチュニアは、寒い日には室内に入れてコートハンガーに引っかけているせいとか、通常一年で終わるところ三年も保っている。

一人暮らしをしていると、寂しさからこぎやって何か生物を傍に置きたくなるものだ。水やりの次は洗濯物の取り込み。

手がバスタオルに触れた時、一瞬手が止まった。

昨日彼が使ったバスタオル。

顔に押し当ててみると、よく日に当たった洗濯物の香りしかなかった。実は、このタオルを洗濯機に放り込む時、ちよっと躊躇した。石鹸の匂いにほんの少し混じった彼の匂いが名残惜しくて。

こうして彼の痕跡こんせきが消えていくと、昨夜の出来事も夢のように消えてしまっただけ。ただ私の体の奥には、彼が与えてくれた疼きうずみがまだ残っている。もうすぐこの疼きさえも消えていくのだろう。

そうなれば、昨日の出来事は本当に夢となってしまうのかもしれない。

私は取り込んだ洗濯物をリビングルームに置いた。

すると、小さな箱が目に入った。昨日、受け取ったまま放置していた、エバーラスティング商会からの自称おぼろげ化粧品の大人の玩具。

改めて中身を手に取ると、その姿はなかなかグロテスクだった。

小説の挿絵さげを描くための参考資料として購入したものだ。小説の中で微に入り細にわたり説明されていたので、なるべくそれに近いものを選んだらこの有様ありさま。まったくハレンチ極まりない形をしている。

エロ用品は全て仕事部屋に隠しているので持つていこうとした時、プツとインターフォンが鳴った。

私はインターフォンを見つめ、思わず体を硬直させる。

時間を見たらもう夜の七時。

いつもならこんな時間に荷物が届くことはあまりない。大抵昼だ。

他の部屋に来たお客さんが部屋番号を間違ったのかもと思いつつ、インターフォン

に答える。

「はい？」

『イーグル便です。お届けものです』

「……ご苦勞様……で……す」

声が震えた。

コン、コン、コン。

ドアが小さくノックされる。

一、二、三。

数えて私はドアを開ける。

「レアチーズケーキとクッキー&クリーム。どっちがいい？」

彼が立っていた。

はにかんだ笑顔で、コンビニの小さなビニール袋を私に差し出す。

「ありがとう」

体をぎくしゃくさせながらも、余裕のあるふりしてそれを受け取ろうとした時、ふと自分の左手に握りしめていたモノに気がついた。

自称おぼろげ化粧品の、どう見ても大人の玩具。

緊張で、私は手が白くなるほど強くそれを握りしめていた。

(ヒイイイー!! まさかのハレンチ自白!)

と心の中でどこぞの悪役集団のような甲高い悲鳴を上げた私は、卒倒しかけるのを必死で堪えて、それを自分の背中中に隠した。

逆セクハラ自爆で死んでしまいそう……

「ありがとう!! とりあえず冷凍庫に入れるね!!」

私は素っ頓狂な声をあげ、彼の顔もろくに見ないままに回れ右して廊下を猛ダツシユする。

光速で自称「化粧品」、正体「大人の玩具」を仕事部屋に叩き込むと、やっつと落ち着いて玄関に戻った。

「冷凍庫に入れるんじゃないかった?」

アダルトグッズなんて見たことも聞いたこともありません、みたいな令嬢風微笑を貼りつけた私を、彼は笑いを押し殺したような顔で見つめてくる。

私は彼に言われて、アイスクリームの入った袋を持ったままだったことに気がついた。

「それともアイスよりセックスの方がよかった?」

「……」

「両方欲しい子、手を挙げて」

「ハイイ」

釣られて手を挙げてしまった私。

もう二人で笑うしかなかった。玄関で彼と一緒に大爆笑してたら、恥ずかしさもモヤモヤした気持ちも吹き飛んだ。

「タミちゃんまじ可愛い。抱きしめたいけど、俺、今日はシャワー浴びずに急いで来たから超汚くて……悪いけど風呂場使わせてもらっていい?」

「もちろんいいけど……」

慣れないお世辞に頬を染めながら、私は玄関で佇んでいる彼を上から下までチェックした。

言われてみれば、確かに汚い。

彼はいつものイーグル便のものではない、何か別のユニフォームを着ている。

それは土ぼこりで所々茶色く汚れていた。

バスケットかサッカーとかラグビーとか、そんなスポーツチーム系のユニフォームで、前身ごろには『10』とプリントされている。

スポーツに全く興味がない私には、それが何のユニフォームなのか特定できなかったけれど、その汗と土の匂いは魅力的に感じられた。

「俺、臭いだろ?」

鼻をピクピクさせていたため、私が匂いを気にしているとも思っただろう。

彼は私の鼻から遠ざかるみたい、距離を取ると、「おじやまします」と言って部屋に上がる。

(汚くてもギョッてしてほしい！)

私は気がつく、その匂いに誘われるように彼の背中にしがみついていた。

首をひねった彼はしがみつく私を見ると、眩しそうに目を細めて笑う。

体を反転させた彼の腕が私を強く抱きしめ、乾いた唇が私のおでこにキスをした。

「そんな風に甘えられたら、全部食べたくなる」

彼が私の耳元で悪戯いたずらっぽく囁ささやいた。

「キヤッ！」

私が突然叫んだのは、彼に持ち上げられて体が宙に浮いたからだ。

彼は私のお尻に両手を掛けてぐっと持ち上げると、肩に担かかるように抱きかかえて歩き出す。

「お、重いから！」

「軽い軽い」

彼は楽しそうに鼻歌を歌いながら、私をベッドまで運んでしまう。

「そこで待ってて。シャワー浴びてくる」

「……はい」

そう答えたものの、私はすぐにベッドから抜け出した。バスルームからは水の音と鼻歌が聞こえてくる。

アイスクリームの入った袋を手握ったままだった。冷凍庫に入れなければ。

レアチーズケーキとクッキー&クリームを冷凍庫に放り込んで、私はふと思う。

(スポーツした後で、お腹が空いてるんじゃないかな？ 夕食時だし)

買い物に行っていないから、冷蔵庫の中に大したものはない。

(でもベーコン、しめじ……牛乳もあるし……缶詰のマッシュルームも棚にあったかも。クリームソース系だったらなんとかなるな)

考えながら、私の手はすでに動いている。ソースだけ作っておいて、パスタは食べた時にゆでればいい。

鍋にバターを放り込んで、溶けたところで小麦粉を投下。ベーコンとしめじをフライパンで炒めつつ、マッシュルームの缶詰を開ける。

(そうだ、冷凍のグリーンピースも入れよう。彼、グリーンピース食べれるかな?)

「キヤッ！」

私が再び叫んだのは、突然後ろからお尻を掴つかまれたからだ。

両手ですつり掴まれて、モミモミモミモミモミモミ……

今日はチュニクにカルソンという出で立ちだが、彼の手の感覚がそのカルソンの薄

い生地を通してよく伝わってくる。

手だけじゃない。お尻に押しつけられているモノの感触も、よく伝わってしまう。
「タミちゃんのお尻、まじエロい。ムニムニでフワフワ。こんなエロいケツあんまりないよ……」

石鹸の匂いに包まれた彼は、カルソンの中に手を入れてまた揉み始める。同時にうなじを吸われる感覚が、たまらなく気持ちいい。

背後にいる彼の表情が見られないのがちよつと残念だけど、彼がこんなに喜んでくれるなら本望だ。

私は手を伸ばしてこっそりコンロの火を消した。

さつきからお尻に当たっているモノがさらに大きくなっていて、料理をしているところではなくなったのだ。

「ここで挿れていい?」

少しかすれた声でそう言った彼は、返事を待たず私のカルソンもろともショーツを引きずり下ろした。

そして私の腰に両手を添えて引き寄せる。

私はこれから来るであろう衝撃に備え、キッチンカウンターの縁を両手で強く握った。
「はあんふ……」

彼は私の腰をさらに引き寄せると、硬く大きなソレを後ろから押しつけ、焦らすようにゆっくりと挿入した。

明るいキッチンで、しかも立ったまままだなんて、いくらエッチなイラストに慣れた私でも恥ずかしい。

だって彼には色々見えちゃっているわけで……

なんとかお尻を閉じようとしても、奥まで入ったモノの圧迫感がすごくてそれどころではない。

大きすぎて少し痛いけれど、彼がゆっくり突き上げ始めると、瞬く間に痛みは快楽に変わった。自分の中がどんどん潤っていくのが分かる。

「あ……あん……ん……あ……あ……あ……あ……」

彼が奥を叩くたびに声が出てしまう。

前から挿入された時とは全然違う感覚。擦られる場所が違って、彼をより深く感じる。彼の体温を感じ取っている背中が熱く焦れた。

「あ! やああ……ダメ、ダメ、ダメ、ダメ!」

後ろから手を回した彼に芯の部分に触られて、私はたまらず大きな声を出した。

膣の奥から感じる深い快感と、クリトリスから感じる鋭利な快感に、私は思わず身を振る。

立ち読みサンプル はここまで